

の御健事を念じて後学の支相の紹介を閉じる。(池野 茂)

(四六) 神廻タイムス社——那覇市久茂地町二丁目二ノ二——
一九七七年刊 二二〇(〇)頁

菊地利夫著 歴史地理学方法論

この書の後半は歴史地理学にとって方法論確立の新时代となり、歴史地理学に新しいテラ・インコグニタが出現したので、未知の大陸を究める探検が始まった。そこで本書はその未知の大陸を望見したにすぎないと著者はいう。しかし、それは謙遜であって、周密な準備をもって、精緻な観察と分析が加えられ、明晰な論理をもって叙述を展開したのが本書である。

著者は冒頭に、歴史地理学とは過去の地理を復原し、これを説明し、叙述する科学であり(一章)、その対象である地域空間は科学の発達によって概念が変化し(二章)、さらに、その本質理論では地域空間が如何なるものであるかということを究明するのに、環境・景観・地域・分布・図形の各理論があり、多様化されており、これは研究者の学問的信念によって取上げた方が違うという(三章)。次に、歴史地理学の論理構造として、総合的・個性記述的論理、理論的・法則定立的論理、および理解的・解釈的論理の三構造の鼎立上にあることを検討し、時代によって、その比重が異なり傾倒方向が若干違ふと説く(四章)。新しい歴史地理学は歴史学と対立するものではなくて、空間的屬性が時間を追って変化する時空連続体

の時間的変化の様相を究め、その理論並びに法則を把握する科学であろうと問いかけている。

歴史地理学として避けて通れないのが、過去の復原であり(五章)しかも、歴史地理的諸事象の説明に因果論・確率論・機能論があり(六章)、さらに時系的説明・発生的説明・発展段階的説明・仮定的プロセスによる説明があるという(七章)。そのように、過去の地理を復原すると、その知識も集積する。それらの知識は、プリンスによると、實在・抽象・知覚の三類型に分かれる(八章)。それらのうちの知覚的知識については、改めて章を設け(九章)、従前の歴史地理学は、過去の地理を外部から考察し、事象の個性的な側面か、事象の法則的な側面を強調してきたが、文化的な事象の発生となる知覚的知識の理解、すなわち内面から本質を把握しなければならぬと力説している。これが本書の最も特徴とするところである。

なお、歴史地理学の叙述理論について、ペーカールのその叙述理論と三知識領域を組合わせて説明し(十章)、歴史の地理的解釈、地理の歴史的解释、地域(景観)史的叙述(十一章)、時の断面の復原(十二章)、時間的断面の堆積型叙述(十三章)、空間進化系列型叙述(十四章)、時空連続型叙述(十五章)などについて論説している。それらのうち注目したいのは、時空連続型叙述理論で、これは地理的事象を形成している諸要素が相互に関係して構成しているが、それぞれの方向に変化することの理論を説述しているのである。要するに インフラストラクチャとエレメントストラクチャとの関連によって変化を考察すべきことを力説している。こ

れも本書のキーノートの一つである。

読後、卒直にいつて章節毎に問題を提起しているように思える。まさしく現代歴史地理学の問題提起の書といえる。そのなかで、歴史地理学の方法論を著者なりの新しい秩序によって整理し、体系化しようとした。このことを著者は、「あとがき」に適切であったか否かは批判をまつという。そのような体系化は、いうまでもなく不可欠であるが、紹介者の私にとって非常に新鮮であったことが二つある。その一つは知覚的知識によるアプローチであり、他の一つは時空連続型の叙述理論である。前者について、その必要性と本質理論との構成をすでにJ・Kライト、P・ハゲット、R・Jショレイ、H・Cプリンス、J・Lアレン等の各学者が論説している。しかしわが国で知覚的知識類型から歴史地理学の本質への接近方法をこれ程詳細に且つ体系的に、海外文献を主体にしながら紹介し、その重要性を力説したのは他にその類をみない。かかる方法概念と手法内容については、紹介者（筆者）も賛向する一人である。この紙面をかりて申すのは甚だ恐縮であるが、紹介者も知覚的知識類型からの歴史地理学の本質への接近方法の概念を紹介者なりにアレンジしてわか国の場合について具体的に論究したいと考えている。

さて、紹介の筆を元に戻し、もう一つの新鮮味を取り上げると、時空連続型の叙述理論である。現代は科学技術の加速度的進歩と社会経済構造の超多様化・高度化により、文字通り激動の世であり、地域空間は多種多様の要素に構成された様々の事象の構造であるから、絶えざる変化の複合であるといえる。その変化の作用・方向・速度は単純ではなく、なお、諸要素は相互的關係をもって結合して

いるが、それぞれの方向に変化し、要素それ自体の変化と他の要素と相互に関連して変化している。したがって、時間の経過による空間構造の変化・進化・発達していく過程と、それに対応する空間過程を明白にする必要がある。これこそ現代が要求している変化の追求であり、現代歴史地理学の課題であるといえる。

従前にも歴史地理学の方法論について詳細に展望した論説は少なくないが、今、右に説述したような二つの要点が本書では光明を発している。この点からみれば、本書は歴史地理学にとって一つのエポックを画するといっても過言ではなからう。なお、本書は歴史地理学を学ぶ者だけでなく、広く歴史学や地理学を学ぶ者にとって、必読の書であると信ずる好著である。

（山田安彦）

A五判 二四八頁 大明堂発行 昭和五二年四月二〇日

二、〇〇〇円